個としてのいのち・交わりの中のいのち

一○のちの尊さと宗教文化

“いのちの始め”の生命倫理問題について、欧米では一九七〇年代以来、主に人工妊娠中絶の是非をめぐり、重い議論がたかわされてきた。その前半は、いのちを尊ぶ人命（個々の人としてのいのち）をもった存在であるかどうかが議論の焦点となってきた。受精の段階から個としての人（いのち）が、その存続が争点のようすをもって、破壊される存在であるかどうかが議論の焦点となっている。つまり、受精以後、胚や胎児がもたれる存在としてのいのちが、もう一つ、生存する形で女性の選択権が形成されてきた。つまり、受精以後、胚や胎児がもたれる存在としてのいのちが、もう一つ、生存する形で女性の選択権が形成されてきた。

中絶の理由として、中絶容認現計では、延命者の主張への配慮が重要である。中絶反対側では、カトリック教会の大きな宗教的価値を果たしてきたが、日本では多数派を占める宗教は仏教や神道だが、神道・仏教教派やそれらに次ぐ勢力をもつ新宗教教団の中で、胚への医療技術的介入により、反対の立場をとっている集団はいないわけではない。

岐阜（1982）Hardert（1991）。

野（1982）立岩（1982）。

進

島

進
問題に対する宗教集団の態度はその国の宗教文化を反映している。その二つの宗教文化の相違が「いつの道の始めよ」と予めぐる現代的な問題への国民の関わりに影響を及ぼし、異なる態度が生まれていると考えられるだろう。

では、日本では脳死の認定に関してはどうなるのかも不思議である。脳死の新たな法的定義は世界中のもので、日本での脳死の認定は非常に困難である。医療機関での脳死の認定が困難であるため、脳死の認定は長い間困難であった。

神道の伝統である「神道の道」では、生命を尊重する観念が非常に強く、脳死の認定は非常に困難である。脳死の認定が困難であるため、脳死の認定は長い間困難であった。

神道の伝統である「神道の道」では、生命を尊重する観念が非常に強く、脳死の認定は非常に困難である。脳死の認定が困難であるため、脳死の認定は長い間困難であった。
この点について、村上陽一郎氏は人工妊娠中絶には許容的であるのに、EFS細胞研究のような再生医療のための重要な研究に反対するのは筋が通らないと述べている（村上二〇〇二）．以下の引用文は講演筆記なので、学問的な周到さを備えた論述ではないことを割引引いて考えなくてはならないが、村上の考え方の大筋は知ることができるよう。

私の見解ですが、廃棄される運命にある凍結余剰胚においても、それは命の出発点であることに変わりない。私自身も個人的にはそう思います。しかし日本の社会の中に、もっと、とんでもないことがある。それと比較してみて下さい。年間四十万くらい救われていく胎児、一時期は百万を超えていました。これが胎児たちの運命と、その母胎から取り出されていった胎児たち、どう処理されているかということは、通常ありえないわけではありません。妊娠週数が少なければ少ないほど、そのままで水に流されてしまっても、聞かせても余計な私に権利を認めることをいう日を、私が何の咎だてもしないで、これはいけないという理屈が通用しないというのでは。
生まれくるいのちへの態度—十九世紀の変容

日本の歴史の中で、胎児の生命の尊厳に対する関心が高まってきたのは、江戸時代の後期、末期である。この時期に「命の尊厳」という概念が広く使われるようになった。これは、人類の尊厳を尊重し、人生の価値を尊重する考え方に基づくものである。しかし、この考え方には様々な批判と議論がなされていた。この辺りのレベルで考えて、考え方が進化しているのだろうか。
個としてのいのち・交わりの中のいのち

理由とされるだろう。とりわけ飢餓の危険が恐れられたときには、人口増加によって家族や共同体の成員全体の生活が危険に陥る可能性があり、人口過剰は防がなければならないと考えられた。これはときには生まれる個々のいのちを犠牲にして、集団のいのちを尊ぶ考え方を導く一因として考えられた。これからの産児制限の背景には、独立した農家が限られた土地の範囲で戸ごとに家計の切り口をし、より豊かな経営体となるようにする農業経営のあり方があった。

子供の生まれかわる信仰の背景には、以前にも述べたように、かつて日本人の間には一人一人の人間の個別性よりも、ある家やある土地に生まれ、一定期間の人生を生きて死んでゆく者、一つの大きな力のちの子供のようなものの中から、ある時間帯だけこの世に生まれて来て、死ぬと、またそのいのちのちの_poolのようないゆくかたをうかがわせる。あるいは早く死んだ子供の葬式は行わず、埋葬にとどまっていたことを考え抜けると、いのちを個別のものと考える傾向が小さ

一九六・

子供の生まれかわる信仰の背景には、以前にも述べたように、かつて日本人の間には一人一人の人間の個別性よりも、ある家やある土地に生まれ、一定期間の人生を生きて死んでゆく者、一つの大きな力のちの子供のようなものの中から、ある時間帯だけこの世に生まれて来て、死ぬと、またそのいのちのちのPoolのようないゆくかたをうかがわせる。あるいは早く死んだ子供の葬式は行わず、埋葬にとどまっていたことを考え抜けると、いのちを個別のものと考える傾向が小さ

一九六・
と考える。 「七歳までは神の子」などという言葉に現れているのと通じる考え方で、胎児や児童はまだ生まれたばかりであるが、個々の人が集団としてのいのちを尊重し、個々のいのちを尊びいただくものという信仰とも結びついていた。明治維新以前の時期、すでに生まれてくる個々のいのちを尊重すべきだとして、堕胎や間引きは絶対に認められなかった。この言説が広がり、個々の人々のいのちを尊重するものという信仰とも結びついていた。

明治維新以前の時期、すでに生まれてくる個々のいのちを尊重すべきだとして、幕府や藩の経済が成り立たなくなるという経済問題に関わっている。これは人々が少なくなるので地域の生産力が減少し、幕府や藩の経済が成り立たなくなるという経済問題に関わっている。明治維新以降の時期、堕胎は禁止され、国力増強を目指した明治政府の政策に変えて引き継がれる。同じ時期に浄土真宗では殺生の禁止を説き、間引きや堕胎を戒め、宗教的な動機から生まれてくる生命の仏門であることを強調する浄土真宗であるが、政府への協力にもたいへん熱心だった。殺生のような戒律違反を避けたものと見なす浄土真宗であるが、この時期には強く殺生が禁じられたという。有元一九九五。

近世社会史における浄土真宗は、義法を視察して実践を求める教義、上に「観行弥陀浄土東方鮮明化」と法、浄土の原則と責任を説いた教団として浄土真宗は際立っていた。殺生のような戒律違反を避けたものと見なす浄土真宗であるが、この時期には強く殺生が禁じられたという。有元一九九五。
安芸国の人口増加がみられ、同僧侶のみられる如きである。この場合、北関東諸国と北陸諸国の間に、また美作国と安芸国山間部との間に、農民の生活状況において決定的な差異はあるまい。とすれば、自然の生存を囲って堕胎、間引きを行なうか、自らの生存を賭して、なお堕胎、間引きを諦めるか、両者を分つポジションは、村高野の生存基盤を狭隘にし、従ってその結果は極めてパラドキシャルであり、前者が「村高野焼」を招き自らの生存基盤を狭隘にし、後者は「家業はけしき国風」を形成し生存基盤を拡大するのである。北海道開拓の際は明治三十年度までに限定すれば、北海道広域移民においても、広島、山口、熊本、福岡の「右四県人専有ノ稲地トモ申ノ景況」を出現し、次いで北米各地に進出していく。そのことは、上記した真宗篤信地帯からの優秀な出稼ぎ、行商人の数を増して移住・移民が潜在的過剰人口による単純な圧力のみによるものでなく、真宗地帯における殺生懸詫のエーテルによって招来された人口増加の現象が、正直、勤勉、節儉、忍耐等の徳を支え、近代化の過程で新たな土地へ移住した、北海道や満州などへの移民者やアメリカ、ブラジルなどへの移民は、浄土真宗のさかんな地域であるにもかかわらず、近代化の過程で新たな生活環境に適応する他を含めた企業としてのエネルギーとして噴出し、「出稼ぎ型経済活動における質量的相乗作用が形成されていたことを意味するものである。